

アルツハイマー型認知症高齢者の立ち上がり行動 How patients with Alzheimer disease stand up with their caregivers?

細馬宏通^{*1}

Hirosomichi Hosoma

^{*1} 滋賀県立大学

University of Shiga Prefecture

1. はじめに

アルツハイマー型認知症では記憶だけでなく、注意 attention や実行機能の問題が指摘されている。視覚的注意が容易に手近なものによってそらされてしまいやすく、とりわけ複数の事象に注意を分散させる分割的注意が問題となる (Ward 2005)。またそれをコントロールする実行機能に問題が生じるため、行動の理由付けや意思決定が困難になり、長期の、ときには短期の目標志向型行動を維持できなくなる (Levine 2006)。

では、注意や実行機能の問題は、実際の介護の現場ではどのような形で現れ、高齢者と介護者はそれをどのように相互作用の中で解決していくのだろうか。本論では、生活の中で繰り返し現れる基本動作「立ち上がり」に注目して、この問いを考える。

2. 立ち上がり行動の何が問題か

2.1 分割的注意の問題としての「立ち上がり」

ある場面から別の場面への移動する際に、わたしたちは椅子から立ち上がり、目的地に向かって歩き出す。この一見簡単に見える「立ち上がり」に、高齢者は困難をきたすことがある。

原因のひとつは、高齢者の足腰の衰えにある。このことを踏まえて、多くの介護マニュアルには、高齢者の立ち上りを援助するための介護者の適切な姿勢や誘導方法が記されている。

しかし、足腰の衰えだけでは説明のつかない理由で、お年寄りが立ち上がらないときがある。フィールドノートからの事例を抜粋しよう。

『カワカベさん、立ちましょか?』と声をかけるがカワカベさんはしばしこちらを見てまた湯飲みに眼をやる。『これはいいのかな』と手に取った湯飲みを不思議そうに見てからこちらを見る。「カワカベさんが TV ルームのソファから腰を上げようとして、目の前のテーブルにこびりついた醤油のしみを見つめる。指先でひっかきながら『これ…』と言って、またソファに腰を下ろしてしまう」。これらの例では、カワカベさんが立ち上がれないのは単に足腰が弱いだけでなく、むしろ行動に関係しないできごとに注意を向けたり、行動の途中で注意がそれること、つまり注意の偏り (Ward 2005) に原因があるように見える。

立ち上がりの遅延場面を観察すると、高齢者はしばしば、介護者の発話、身体行動、そしてさまざまな環境要因へと注意がそがれている。どこかに向かって歩くことだけでなく、立ち上がることも自体もまた、その人の分割的注意と実行機能によって構成される目的志向的行動であり、単なる筋肉動作ではない。

立ち上がり行動はまた、個人による活動とは限らない。介護者の発話(声かけ)や身体行動が関わる点では、高齢者の立ち上がり行動は、マルチモーダルな相互行為であると考えることが

できる。そこで、本論では、あるグループホームの入居者の立ち上がり行動場面をビデオ撮影し、その分析を通して、高齢者の立ち上がり行動にどのような困難があり、どこに解決の糸口があるのかを考察する。

3. 方法

3.1 データ収集

本研究では、2009年、H市のグループホームにおいて、カワカベさんご家族に許可をいただき、食事場面の終了時における立ち上がり行動の過程を計六回ビデオ録画し、この記録をもとに、カワカベさんと介護者とのインタラクションについてマルチモーダル分析を行った。なお、アノテーションには ELAN を用い、トランスクリプトの記法は、会話分析の手法 (串田 2006) に従った。

3.2 カワカベさんについて

カワカベさん(仮名)はアルツハイマー型認知症と診断されており、名前や現在の年月日、身近なモノの名前の再生や、単純計算に困難をきたしている。また、食事後の立ち上がり行動は入居者の中でも最も遅い。しかし一方で、カワカベさんは自発的に休憩室から食堂に移動したり、夜中に一人でベッドから起き上がって徘徊することがある。これらのことから、食後のカワカベさんの立ち上がりの遅さは、立ち上がるための身体能力が欠如しているからではなく、一人で「食事の終わり」を構成することに困難を抱えているからであり、それは人や環境に対する注意の組織化の問題であると見られる。

介護者はしばしば「ごちそうさま」「立ちましょ」といった、通常の人々に対する声かけと同じ発話によって、立ち上りを促そうとするが、カワカベさんは「え」「なんで」といった非選好的発話によって、しばしば立つことへの勧誘に対して非同意表現をする。これに対して、グループホームでは「皿を洗う」ことを食事のあとの行為としてルーティーン化している。同意しないカワカベさんに対しては「洗い場でお皿洗いましょ」という具体的なゴールが示される。カワカベさんがもっともスムーズに動く場合には、このゴールが示された時点で、自主的に立ち上がる。

カワカベさんが自主的に立ち上がらない場合、介護者がそばで立ち上りを介助する方法がある。介護者は椅子の向きを少しく変えながら机と椅子との間に隙間を作り、カワカベさんが机に手をつけて立ち上がりやすい態勢を作る。このとき、椅子の移動によって、カワカベさんの視線はしばしば、介護者に行く。介護者はアイコンタクトが行われた段階で、「洗い場に行くよ」といながら指さしを行う。秒単位の短い時間に、行動への勧誘と行動のゴールとが一挙にカワカベさんに示され、しかもその行動への態勢が身体行動によって整えられたとき、初めてカワカベさんは自らの体を前屈させ、体重を机や介護者に預け、手をつき、立ち上がる事ができる。

ただし、介護者が繰り返し声かけをしても、カワカベさんがなかなかテーブルに手をつかず、前屈態勢に入ることには抵抗を示し、立ち上がらない場合がある。たとえ、介護者がそばにいても、カワカベさんが自らの体重を介護者に預け、前屈をし、腰を椅子から持ち上げない限り、カワカベさんの全体重を介護者一人の力で持ち上げるのは難しい。

このため、それぞれの事例では、カワカベさんに自主的に立ち上がってもらうためのさまざまなやりとりが、介護職員とのあいだで見られる。

4. 結果と考察

4.1 立ち上がり行動から逸脱する注意

事例 1-1 は、あるグループホームでの入居者カワカベさんと介護者、そして観察者とのやりとりである。(図 1)。

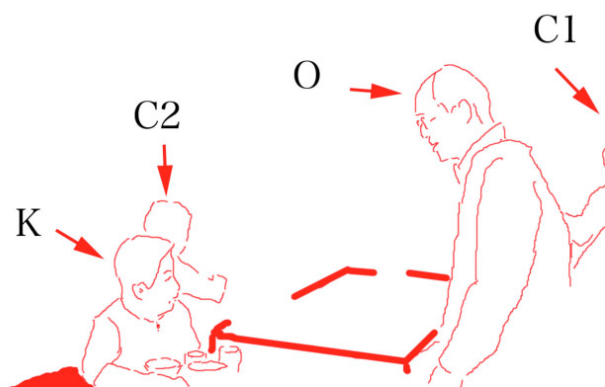


図 1. 事例1,2 での人物・環境配置。C1:介護職員 1(流しの前にいる)、C2:介護職員 2(他の入居者の食事介護中)、O:観察者、K:カワカベさん

《事例 1-1:お茶碗持って来て》

CT1:介護者 1、CT2:介護者 2、OBS:観察者、K: カワカベさん(CT1 は流しの前で皿を洗いながら、K さんに声をかける。)

- 1 C1: [カワカベさ::ん] (流しの前から)
- 2 O:[カワカベさ::ん]
- 3 C1: お茶碗もってきて洗わんならんし
- 4 (1.4)(K:両手で卓上のお盆に手をかける)
- 5 O:うん
- 6 (0.85) (K がお盆を持ち上げようとする)
- 7 O:[あ]
- 8 C1: [た]てるか? :
- 9 O:さき立ちましようカワカベさん
- 10(1.2)
- 11 O:さき立つてから(.)それ持ちましよう
- 12 K:あそこへいけ[ばいいの?] (指さし)
- 13 O: [はいはい]

まず、1-6 行目の、カワカベさんがお盆を持つまでの経緯に注目しよう。

カワカベさんは腰が弱いため、自力で椅子から立ち上がるためには、椅子を引き、両手でテーブルの上に手をつき、上半

身をかがめてから、腰を上げる必要がある。そして、この一連の動作では、両手は手ぶらでなければならない。ところが、この事例の直前では、カワカベさんは卓上の台ふきを取り上げようとし、そして事例中では卓上の食べ終わった食器盆を取り上げようとする(4-6 行目)。このため、手がふさがってしまい、立ち上がり行動が遅延している。カワカベさんの注意の方向付けは、ランダムではなく、周囲からの声かけによって相互行動的に産み出されている(図 2)。1,2 行目に介護職員 C1 と観察者 O が同時に声をかけると、カワカベさんの視線は、正面から移動を始め、観察者に向き始める。次に C1 が「お茶碗持って来て」と言った直後には、再び視線の移動が始まり、「洗わんなんし」の直後には、両手が動き始めて卓上の食器を持つとする。

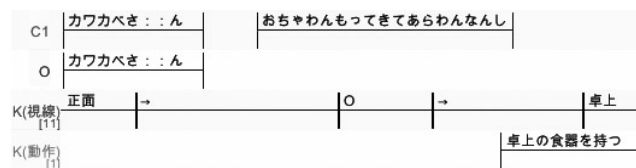


図 2. 事例 1 におけるカワカベさん(K)の視線変化と周囲の発話との時間関係。C1:介護職員 1 の発話、O:観察者の発話。矢印は視線の移動中を指す。

カワカベさんの視線は、まず発話者に向き、次に発話者の発話内容(お茶碗)に向いており、しかも反応は発話の直後です。しかし、立ち上がるために必要なのはお茶碗に向けられる素早い注意変化ではなく、むしろ注意をお茶碗からそらせて立ち上がりための動作に集中することである。カワカベさんは、介護職員の言うことを聞いていないのでもなければ、注意が遅延しているのでもない。ただ、発話者と発話内容の一部に注意が集中し過ぎているのである。

では、カワカベさんは、単に目の前のお盆に執着するだけで、洗い場に行くという目標が認知できなくなっているのであろうか。少なくとも 12 行目の段階では、そうではない。カワカベさんは洗い場に目を移して「あそこへいけばいいの?」と言いながら、洗い場方向を指さしている。

しかし、洗い場に行くという目標を確認した 12,13 行目のやりとりのあともなお、カワカベさんはお盆から注意をそらすことに困難をきたしている。この後、観察者 O の「先立つてからそれ持ちましよう」、C1「立つてえ先に」「立つてそれ持たないと」「立つてからでないと危ないよ」といった声かけにもかかわらず、カワカベさんは繰り返しお盆を持つと試みる。

4.2 注意方向の変更と問題の解決

思わぬ解決が訪れるのは、トランスクリプトの 1 行目から約 1 分たった時点である(事例 1-2)。

《事例 1-2》

- 1 C1: それカワカベさんこっちのテーブルに置き
- 2 C2: こっちのテーブルにいっぺん置こう
- 3 K: (右側のテーブルから左側のテーブルに盆を移動)
- 4 C2 そうそ[こ]
- 5 C1: [そ]うそうそう

事例 1-1 から約 1 分間、カワカベさんは自分から見て右側のテーブル(図 3 T1)の上にあったお盆を、繰り返し持ち上げようとしていた。これに対して、事例 1-2 では、流しの前にいた C1 は、別のテーブル(図 3 T2)を指さして、「それカワカベさんこっ

ちのテーブルに置き」と発話する。C1 の横にいる C2 も「こっこのテーブルにいっぺん置こう」と言う。

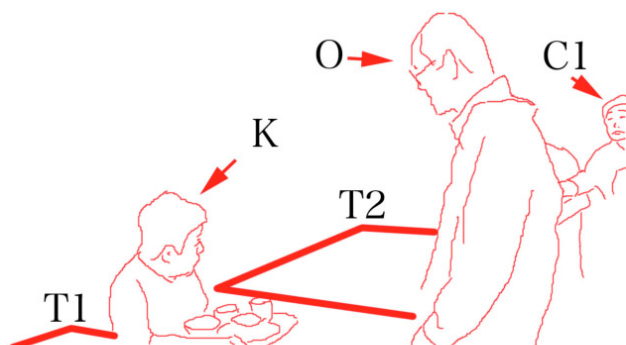


図 3. 事例 1-2 におけるテーブル配置。C1 は「こっこのテーブルに置こう」と言いながら、お盆の載っていたテーブル(T1)とは別のテーブル(T2)を指さしている。K は T1 から T2 にお盆を移そうとしている。

この二人の発話の直後、カワカベさんは視線を C1 の指しているテーブル T2 に移動させて、持っていたお盆を座ったまま、T1 から T2 に移した。さらに C1 の「そうそうそうそう」(5 行目)のあと、カワカベさんは、お盆をテーブルの端から、より安定したテーブル中程まで押し込み手を離れた。この直後カワカベさんは自ら T1 と T2 に左手と右手をかけて、この場面で初めて手ぶらで、立ち上がり行動を試みた。これを見た C2 がカワカベさんに近寄って、彼女の上半身をかがませながら腰をひっぱりあげ、立ち上がり行動を介助して、カワカベさんは立ち上がった。この一連のやりとりで、鍵となったのは、C1 の「こっこのテーブル」というアイデアである。カワカベさんは繰り返し、お盆を持ち上げて運ぶということに執着し、そのたびに、観察者 O と C1 とのことばによる制止によって、行動を中断させられてきた。この繰り返しに対し、C1 は隣のテーブル T2 という新たな目標を導入したことになる。さらに、C1 は、声かけによってカワカベさんの視線を自分に向かせた上で、指さしと視線によって、カワカベさんの注意を T1 から T2 へと移動させている。この結果、カワカベさんは、お盆の持ち上げを途中で止めるのではなく、T2 という短期的な目標に向かって移動させることができた。そのことによって彼女の行動はいったん完結点を迎え、次の行動(手をテーブルについて立ち上がりの準備をする)にスムーズに移行した。

4.3 短期的目標の設定

事例 1-1,1-2 のやりとりには、認知症患者と介護者との問題解決におけるパターンのひとつを見ることができる。ひとつは、当人の注意が特定の対象(ここではお盆)に絞られてしまい、問題行動(お盆の持ち上げ)が行為連鎖のなかで繰り返し起こり、目標となる行為(立ち上がり)になかなかとどろきつけない、という事態である。介護者は、こうした問題行動の繰り返しに対し、同じ声かけや指示を行い、さらなる問題の繰り返しに陥ることがしばしばある。これに対して、今回の事例では、問題行動を制止するのではなく、問題行動に短期的な目標(隣のテーブルにお盆を置く)を設定して、それを完結させるという解決策がとられた。これによって、当人の注意は、特定の対象から離れ、目標となる行為へと移行することが可能となった。すなわち、問題行動

の中断ではなく、行動に仮の目標を設定することが、解決の糸口になっているのである。

実際には、問題行動がどのような注意対象によって起きているのか、それに対してどのような「短期的目標」を設定するかを見極める唯一の方法があるわけではない。McCurry(2006)が書くように、認知症患者とのやりとりでは、一つの解決があると考えるよりも、そのつど患者と介護者の創意工夫によって産み出されると考えたほうがうまくいくことがある。しかし、こうした創意工夫の経験の積み上げは、次の工夫を思いつくヒントにはなる。今回の事例のような、偶然の解決の中に、どのような創意工夫が埋め込まれており、それらがどのように他の場面に応用できるかを考え続けることによって、少しずつ、認知症とのつきあい方の知恵が蓄積されていくだろう。

参考文献

- [Levine 2006] Levine, R.: *Defying dementia: understanding and preventing alzheimer's and related disorders*. Praeger Publishers. 2006
- [McCurry 2006] McCurry, S. M.: *When a family member has dementia: steps to becoming a resilient caregiver*. Praeger Publishers. 2006
- [Ward 2005] Ward, A. *Attention*. Psychology Press. 2005